

# さながら、 好々爺



大ヒット作となった映画『おくりびと』は、主に山形県庄内地方を舞台にしている。酒田市内のシンボリックな風景として、山居倉庫もちらりと画面に登場する。米穀取引所の付属倉庫として明治26年に建てられた山居倉庫は、土蔵造り12棟が整然と並ぶさまが美しく、今では庄内地方有数の観光スポットにもなっている。

山居倉庫と同趣の建物がわが秋田にもある。秋田市新屋の秋田公立美術工芸短期大学の敷地内にある旧国立新屋倉庫がそれだ。こちらは昭和10年の完成で、山居倉庫より若い分だけ、たたずまいもやや近代的。山居倉庫が舟運を前提にしているのに対して、こちらは鉄道輸送が前提。倉庫の前がそのまま貨物のプラットホームになっていて、JR羽越線新屋駅と引き込み線につながっていた。線路はもう取り除かれているが、そのプラットホーム部分に立つと、一昔前の鉄道のイメージがほうふつされ、思わず郷愁にひたってしまう。倉庫から新屋駅に続いていた引き込み線跡は、いかにも線路跡を思わせる緩やかな弧を描いたまま遊歩道として整備されていて、春には桜並木が美しい。

米の倉庫としての役目は平成2年に終えたが、市民からの保存活用の要望の声も強く、現在は、美短の実習棟や新屋図書館の一部などとして「第二の人生」を送っている。とかく、価値ある歴史的建造物が安易に解体されてしまうことが少なくなかった秋田においては、米の国・秋田の「生き証人」である新屋倉庫に保存活用の機会が与えられたことは幸いであった。

今でも米の倉庫として現役の山居倉庫に対して、新屋倉庫は、学生の実習や図書館など、いわば、「文化の醸成」の場になっている。今でも新屋倉庫からは、さまざまな夢や希望の「出荷」が続いている、と言っているだろうか。

うっすらと雪をまとった8棟の倉庫の連なりは、さながら冬の連山を思わせる。秋田にとっては、いつまでも残しておきたい風景の一つ。